連載エッセイ 199
人生讃歌

# 輝く風景

以前ある雑誌の仕事で、地域に住んで静かに何ごとかをしている人をたずね、話を聞いて書いたことがある。そこでぼくは自分が忘れかけていたことを思い出した。つまり現代がどれほど厄介（やっかい）な世の中であれ、われわれのなかにあるはずの善意を根気よくはぐくみ守り続けてゆけば、新しい方向が開けてくるに違いないという希望である。

★

大きなタクシー会社の専務取締役をしている男性が、道路などのゴミ拾いを十年以上も続けていると聞いて、お会いしに出向いた。五十五歳だというその専務さんは『十二年前、私は毎朝五時ごろから近くの公園を散歩していたんですが、その公園や道路のゴミを拾っているお年寄りがいました。八十歳で足が少し不自由でしたが、私は一年半もの間、それを見ていただけでした。ある雨の日、雨合羽（あまがっぱ）を着てゴミを拾っているその方の姿にうたれて、自分もゴミを拾いはじめたんです。思えば一年半もの間、ただ見ていただけの自分の浅はかさが恥ずかしいです』と言った。ゴミ拾い場所は野球場、ソフトボール場、ゲートボール場、テニスコート五面、駐車場、記念植樹の広場、噴水のある公園など広大な範囲だ。空き缶、空き瓶、犬のふん、煙草の吸い殻、プラスチックの弁当箱など毎朝、大型ビニール袋に二つ以上あるという。

専務さんは農家の十二人兄弟の九番目に生まれ、中学を出ると造材山で働くが、やがて観光バスの乗務員を経てタクシー乗務員になり三十年勤める。三十一歳のとき姉ががんになり、その手術に自分も献血したが乗務員仲間も献血してくれた。そのありがたさを社会へ返したく専務さんは一年に三回献血を続け、いま七十回になったという。『最近、血液センターから年賀状がくる』と笑った。専務さんの奥さんに、夫がゴミ拾いをすることについて聞くと照れくさそうに笑うだけだ。中学二年の娘さんも初めは父のゴミ拾いがいやだったらしいが、今は黙っているという。しかし学校からの通知表には担任の先生から『学校ではみんなの先に立って廊下の掃除や窓ふき、給食の後片付けをしている』と書かれてあるという。父の姿勢が娘さんに伝わっているのだ。専務さんは『私は中学のとき働くのが忙しくてあまり学校へ行けなかったから、通知表に1が七個もあった』と笑う。しかしその後、働きながら勉強して、いまでは連立方程式も楽に解けるそうだ。新聞は隅から隅まで読む。

専務さんが言う。『私がゴミを拾うのには何の理由もありません。ゴミが落ちてると気になるだけです。目の前をきれいにすると気持ちがいいからです。こんなことに理由なんてないでしょう。ただ拾えばいいと思うんです』最近いっしょに拾う人が増えてきたうえ、捨てられるゴミも減ってきた気がするという。たぶん拾い続ける人を見て捨てづらくなったのかもしれないと、ぼくは考える。表彰の推薦も固辞している。『人として当たりまえのことをしているだけで、とても表彰されるようなことではありませんから』と言う。

専務さんと別れて駅へ向かいながらぼくは、まぎれもなく傑

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

出した人に出会った感動で体が震え続けるのを感じていた。

★

あるとき、廃山になった山奥の石炭村に、頼まれもしないのに近所の家の玄関の戸や壊れたトイレを直す人がいると聞いて会いに行った。Tさん、七十六歳。二十年前に奥さんを亡くして二人暮らし。二人の子供は結婚して札幌に住み孫もいるという。地域の人に感謝されているそうですねと聞くと『なんもやってない』とそっけない。雪が降ると朝五時に起き、独居老人の家を回って道路や屋根の雪をよける。寒い日はゆっくり寝ていたいが、困っている老人のことを考えると、とても寝てられないと言う。道路わきにある共同風呂は温泉で、四キロ山奥から引く湯で温度が七度と低いためTさんが灯油で沸かす。毎週一回、日曜の二時から六時だけで十五人ほどが入りにくる。湯を捨て桶や湯船を洗うのもTさん。『そばに住んでるから当然のこと。こんなことで喜んでくれるんだから、こっちが嬉しいよ』と照れる。近所の人に聞くとTさんは道路わきにコスモスを植えたり、お年寄りを集めてカラオケ大会やカルタ大会もやるという。独り暮らしの七十歳の女性は『Tさんいなかったら私、札幌の息子のところへ行く。Tさんいるから私ここに住む』と言う。『Tさんは地域の家の風呂や窓や台所が壊れるとすぐ直してくれる。新しいトイレや風呂も作ってくれる。材料はTさんが集めてきてくれる。それでお礼しても受け取らないんだ。年金で食べていけるからって』と言う。

秋田生まれのTさんは二歳で父母と北海道の炭山へ来た。長男で下に十二人も弟や妹がいたため十四歳から炭鉱で働き、二十歳で兵隊に行き中国へ。終戦後また炭鉱で働く。『貧乏で妹や弟ら五人も亡くなった』とTさんはうつむいた。父が珪肺病で死亡、やがて母も死に、三十二歳のTさんが七人の弟、妹を育てた。当時Tさんはカネがほしくて有給休暇の日も働きに出てカネにかえたという。

★

ぼくはTさんと別れて山を下りながら、Tさんが最後に言った言葉を反芻し続けた。『こんなこと馬鹿くさいと思ったらできん。みんなの喜ぶ顔を見るのが楽しいんだ。とにかく人に声をかけられるのが嬉しい。人間、人に声をかけられなくなったらおしまいだ』

道路わきに続くコスモスの花が、夏の陽に光り輝いて眩しかった。 Ⓙ

挿絵／中江潤一

■小檜山　博（こひやまはく）：作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。